「単純」危機管理の極意

関西学院大学災害復興制度研究所教授
山中　茂樹さん（60）

安倍首相の所信表明演説で、カタカナ語が109回も登場したというニュースを読んで、旧西ドイツの大統領グスタフ・ハイネマン（1899～1976）の逸話を思い出した。

彼は1973年、英語の氾濫を憂え、「なるべく母語を使おう」と国民に呼びかけた。それは国粋的な排外主義ではなく、「教養ある階層と広範な大衆」との間に溝ができることを懸念してのことだった。一部の人が特権的に情報を操ることは「民主主義にとって危険なことだ」と考えていたらしい。（『ことばと国家』田中克彦著・岩波新書）

防災や危機管理の世界でも横文字が花盛りだ。リスクコントロール、クライシスマネジメント、アクションプラン、BCP（ビジネス・コンティニュイティ・プラン）……。私の経験では、「リスクコミュニケーション」をどう定義するかに延々2時間余り、論議を費やした委員会もあった。

横文字を使い、仰々しい解説をするのも、危機管理が商売になる時代になったからかもしれない。だが、防災や危機管理は難解であってはいけない。わかりやすさが第一である。

折しも今年は、ニューヨークの世界貿易センター（WTC）ビルが崩壊した同時多発テロから5年。劇場用映画も相次いで公開された。

当時、WTCビル北棟90階に入居していた二つの日本企業の対応は、この問題を考えるうえで象徴的である。93年にもWTCビルは地下駐車場を爆破されるテロに遭っている。危機管理を業務の柱に掲げる一方の企業は、これを教訓にマニュアルをつくり、パソコンの中に記憶させた。かたや金融関係の会社は、単純にゴーグルやヘルメット、マスク、手袋など避難用の七つ道具をリュックに入れ、社員の机の下に置かせた。

結果、突入した飛行機の衝撃でマニュアルを記憶したパソコンはダウン。金融関係の会社の7人は支店長のひと声で避難用具を身につけ、避難階段に走った。両社とも犠牲者こそ出なかったが、「単純」が危機管理の極意であることを見せつける出来事だった。

「いざ鎌倉」という故事がある。鎌倉時代、一族の者に財産を横領され、落ちぶれた侍が、それでも鎧、長刀、馬は手放さず、幕府から号令がかかったときに一番乗りをしたという話だ。

欧米には欧米の、日本には日本の危機管理があるはずだ。クライシスマネジメントなどといわず、「いざ鎌倉」計画といってはどうだろう。

やまなか・しげき　大阪府生まれ。朝日新聞神戸支局次長の時、阪神大震災に遭う。県阪神・淡路大震災国際検証会議オブザーバーなどを歴任し、05年4月から現職。著書に「震災とメディア～復興報道の視点」など。